

## 2020年度 学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

本校の教育理念	創立者福澤諭吉が唱えた「独立自尊」を教育理念とし、未来の先導者の育成を目指している。 本校は中高一貫6年制の男女共学校として1992年に開校し、横浜初等部を含めた小中高一貫校として2年目を迎える。情操豊かで、創造力に富み、思いやりが深く、広い視野に立って物事を判断し、社会に貢献できる人を育てる。そのために社会的責任を自覚し、知性・感性・体力にバランスのとれた教養人の育成を教育目標としている。
本校の特色	基礎を確実に身につける、きめ細かな指導を基本とし、開校以来、語学と情報リテラシー教育に力を注ぎ、「異文化交流」と「情報教育」を教育における大きな柱としている。 本校では、帰国生入試を経て入学してきた生徒が中等部では約20%、高等部では約25%という高い割合を占めており、異文化の交流が自然な形で学校の中で生まれている。 二人担任制を導入し、きめ細かい生徒対応を目指している。

### 【2020年度総括】

#### ●教科教育活動について

開校以来、各教科とも一貫校の特性を生かし、中等部は基礎的知識の習得、高等部では習得した知識を基に論理的思考や表現力を養う活動を行い、中高で継続的、発展的な教育内容になるよう配慮している。

2020年度は、新型コロナ感染拡大に伴う完全休校継続中に始まるという前代未聞の1年であった。命を守ることが最優先の世の中で、学校という場の責務として「学びを継続する」ために教科も委員会も全力を尽くした。本校では数年前より学年や教科により程度の差はあるもののGoogle Classroomを導入していたので、オンライン学習をスタートさせること自体は大きな障害ではなかったが、特に1年生の保護者と情報科教員の全面的なサポートが必要であった。オンライン学習の実施にあたっては、ご家族の生活環境の劇的な変化、生徒の心身の健康、各家庭のオンライン環境等を考慮すると、ただカリキュラムを消化するための授業配信にならぬように、課題の量とレベル、リアルタイム授業の割合、生徒とのインタラクションのあり方を慎重に探りながら進めていった。結果的に、教員には新しい学びの形を探求すると同時に実践する機会となり、生徒は学ぶ姿勢において適応性と柔軟性を発揮した。

オンライン学習の利点として、自分のペースでの学習、復習のしやすさ、対面授業では見られなかった積極性の発露などが挙げられる。長い通学時間を有効に使えた生徒も多かったようだ。その一方で、生徒と教師間、生徒間でのインタラクションによる深い学び、理解度の即時把握などは対面授業でしか得られない面もあった。また、画面の向こうで学習に遅れをとってしまう生徒も一定数いたことは否めない。9月からの対面授業は、一部中高分散登校の時期もあったが、オンライン学習と並行して順調に進めることができた。緊急対措置としてのオンライン学習の一斉導入であったが、可能性と課題を認識することができ、今後とも世の中の状況、教育のあり方の変革に応じて活用していくことになる。

新型コロナ感染問題関連以外のことでは、小中高一貫教育が2年目を迎え、学校の規模がまた大きくなった。これまでの英語、理科に続き、4年生の数学でも少人数教育の実施が開始し、早速成果が見られた。中等部生にはGIGAスクール構想によるノートブックPCの貸与があり、オンライン学習の充実の一助となった。また、第二外国語の履修が5年次から開始された。制約の多い1年ではあったが、教育環境の整備は着実に進んだ。

#### ●委員会活動について

各委員会は、本校の教育目標が達成されるよう設置され、全ての教員が参画している。毎年各々が管轄する教育場面において生徒の安全や、教育効果を検証し評価している。委員会の活動もまた新型コロナ感染拡大の対応に追われた。生徒係は常に校医と緊密に連絡をとり、様々な対応にあたった。生徒の分散登校、分散バス乗車による密回避を図った。体育祭、旅行、合唱コンクールなどほとんどの行事は中止を余儀なくされたが、文化祭だけは早くからオンライン開催を決定し、綿密な計画のもと全く新しい形として成功を収めることができた。ここで培われたスキルがその後の卒業生を送る会で発揮され、学びとその後の実践が連結される事例もあった。また、中等部の合唱コンクールは実施できなかったが、音楽発表会を実施した。

教務関係では、校務全般のペーパーレス化の一貫として昨年導入された新校務システムは問題点が改善され、教員も慣れてきて、出欠記録管理、教室のオンライン予約システム等が軌道に乗った。生徒会は、休校中の早い段階から定期的なオンライン配信により学校と生徒をつなぐことに貢献し、生徒会の存在も大きく意識されたように思う。クラブ活動は体連・文連ともに大きな制約があったが、生徒は「できることをやる」の精神で前向きに課外活動に取り組んだ。この実現のためにクラブ運営委員会は、感染予防対策を厳守しつつ生徒の課外活動への制約を最小限にとどめ置くために日夜奔走した。諸届や諸連絡にはGoogle Classroomが有効活用された。異文化交流や芸術鑑賞会に関しては、新型コロナ感染拡大の影響ですべてのプログラムが中止されたことは残念であった。広報活動に関しては、これまでの直接の活動に加えてオンライン活動が新たな戦略となりうる感触を得たが、有効な広報活動の実現には専門家のディレクションが必要であるとの認識には変わらない。施設関係においては、感染予防のための手洗い場の新設、蛇口の交換を始め、体育施設の雨漏りや生徒ロッカーの一部改修などが実施された。28年を経過し建物の老朽化などハード面での問題は今後も課題として残る。総じて、各委員会は緊急事態に迅速に対応し、結果的に新しい可能性も見いだすことができたと言える。

#### ●保護者からの評価について（学校関係者評価より）

2018年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施している。本校生徒の保護者代表（世話人）の33名（中等部19名/高等部13名/監査1名）に、本校が実施している自己評価の方法や設置項目などに対する評価をしていただいた。

手順としては、事前に提示した本校ホームページの学校評価一覧を元に、アンケートの設問に4段階評価で回答をお願いした。33名の回答中、33名分すべてを有効な回答として集計をおこなった。どの設問に対してもD（不十分）は無く、全回答数（回答者33x設問数6）198のうち、A（十分）が58.6%、B（おおむね十分）が39.9%と多くの設問で十分、おおむね十分との回答であった。Aの評価の割合は2018年度開始以来もっとも高かった。

アンケートは、評価内容に対してではなく評価の仕組み（設置項目や評価方法）に対するものである。学校は自己評価として、教科・委員会共に目標達成度に応じてA～Dの評価をつけているが、教育現場では評価を数値としてとらえにくい面がある。33名の保護者代表の方々に、詳細な年間の報告と分析を読んでいただくことで、貴重なフィードバックを得ることができた。結果として、今年度はオンライン学習の取り組みが高く評価された。特に、学校とご家庭の協働で1年間を乗りきったという達成感があったというご意見や、オンライン学習の副産物として、これまで実現できなかった「授業参観」が叶ったというご意見が寄せられた。項目外ではあるが、通学バスについては、湘南台系統の密回避対策、辻堂系統のバス減便に対する対応が求められた。

## 2020年度 学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

### 1. 教科における自己評価

評価方法	年度当初に各教科の学年、分野毎に授業担当教員が授業計画と目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に、授業計画の実施状況と、目標の達成度について授業担当教員が4段階で評価を行う。 A 達成できた（80%～100%）／B ある程度達成できた（60%～79%）／C あまり達成できなかった（40%～59%）／D 達成できなかった（～39%）
総合評価規定	各教科の学年、分野毎の評価を集計し、以下の計算で算出されたものを総合評価とする。 各分野と学年の評価を数字に換算 A→4 B→3 C→2 D→1 その平均を総合評価点とし、下記基準でアルファベット4段階とする。 A 達成できた（総合評価≧3.2）／B ある程度達成できた（総合評価≧2.4）／ C あまり達成できなかった（総合評価≧1.6）／D 達成できなかった（総合評価<1.6）

教科	目標と具体案	結果	次年度への課題と対策	中期的な課題	前回評価	今回評価
国語	<p>中等部では正しい日本語の表記と基礎的な言語活動方法の習得を目指す。</p> <p>正しい音読、適切な読解、テーマに合わせた生徒各自の表現力の体得を目指す。</p> <p>高等部では文章を批判的に読解し、検証できるようになるための手法を学習する。生徒が自分で問題を発見し、解決する力を養うことを重視する。あわせて、論文を書くためのスキルの体得を目指す。</p> <p>百人一首大会、能狂言鑑賞、授業での古典籍の使用など、本物に触れることで日本の伝統文化に関する知識・教養を得ることに主眼を置いている。</p>	<p>コロナ禍中のリモート授業に於いて、動画やスライドを準備し、フォームやドキュメントを提出させる方法でインタラク션을試みた。基礎学力の欠如が解決したとは言えないが、ネット上に置かれたファイルに何度もアクセスする等、例年とは違うやり取りの方が得意という一部の層が顕在化した。論文実習は、データベースへのアクセスやプレゼンなど、例年自明となっていた手段が取れず、自立の助けは不十分と言わざるを得なかった。但し、意外な結果として「オンラインの方が担当とのインタラクシオンが増えた」としたり、通学のロスなく書き上げる事ができたとする等、底上げ出来た層も一定数あった。能狂言鑑賞会だけは実施することができた。疎遠になっているライブの実技に対する飢餓感があり、例年より一層の高い受け止め方ができた。質疑応答も積極的に行われた。</p>	<p>教える側にも教わる側にもネットワークの技術が不十分なところがあった。最終学期に対面で擦り合わせが出来て、教え合いがあり、工夫を共有した。より一層の向上が図れるだろう。</p>	<p>6クラス×6学年が揃う年度に向けて、教科目的を損ねることなく、如何に合理的に生徒負担を軽減するか。</p>	B	B
社会	<p>中等部では地理・歴史・公民の三分野にわたり、バランスよく基礎学力を習得することで、多角的かつ幅広く社会をとらえる視点を持つことを目標とする。</p> <p>高等部では、学部選択を見据えて各科目高度な専門的知識を習得するばかりでなく、習得した知識を用いてアウトプットできるようにプレゼンテーションや論述の機会を多く設ける。</p> <p>史跡や企業への見学を実施し、実際に目にするにより、授業で習得した知識について自ら考え、理解する機会を設ける。</p>	<p>中等部では暗記に頼らず、資料をもとに考える社会科学習の基本的な姿勢を育むことに留意した。学習の始まりがオンラインによる課題の配信となったが、初めて中学の社会を学習する生徒の多様な背景に配慮して知識の偏重にならないよう内容を精選して配信。理解度を確認するために定期的に課題を提出させた。課題に対するコメント、添削指導によってフィードバックを行い、学習内容が定着するようにした。</p> <p>9月からの対面授業においても1学期の配信課題の学習をもとに、資料を活用した授業を行えた。対面授業開始後もオンラインでの課題配信を併用した学習を行った。</p> <p>2年生は開校以来、はじめて1学年を複数の教員が担当した。学年で均質な学習となるよう学習内容の精選、配信課題の工夫を行った。</p> <p>高等部では、休校期間中に実施予定であったプレゼンテーション等の機会が失われてしまった。代替としてレポートや課題によるアウトプットの機会が増えたが、メディアリテラシーへの意識の薄さが露呈した部分も見られた。</p> <p>制約された環境の中で、中等部における目標は最大限の達成を目指すことができたと言えるが、高等部においては「本物」に触れる機会やアウトプットの機会を例年よりも十分に提供できなかった反省がある。</p>	<p>中等部では入学までの知識量に頼らず、多様な背景を持った生徒の個性や経験を活かした学習を工夫する。</p> <p>社会科三分野の基礎をバランス良く身に付け、それぞれを結びつけて社会のできごとに興味、関心をもち、主体的な学びの姿勢を育む。</p> <p>オンラインによる課題と対面授業を組み合わせた学習方法の工夫を継続し、多角的なアプローチで生徒の興味、関心を高め、深い学びとなるようにしたい。</p> <p>高等部では、引き続き大学における研究活動をターゲットとし、「論文実習」の履修を前に、論理的思考を養い、客観的論述の訓練をすることが必要になる。</p> <p>Web授業の中でもプレゼンテーション等を企画できるよう研究に努めたい。</p> <p>また、本物を見る・本物に触れる機会を失った場合に、その代替としてのプログラムをいかに提供できるかが課題となっている。</p>	<p>横浜初等部との連係の方法を模索しつつ、中高6年間のカリキュラムについて引き続き検討を行う。</p> <p>帰国生などを中心とする基礎知識の未定着に対し、どのような対策を講じるべきかの検討が必要である。</p> <p>上記二点は「知識量」の増加につながるが、一方で目の前の点数にこだわりがちな生徒が多い中、いかにアカデミックな好奇心を植え付けていくか、総じて「知識量」と「学問への入り口」の両立が課題といえる。</p> <p>オンラインを活用した学習が特別な取組みではなくなった。対面授業との組み合わせた学習方法の工夫を継続していく。</p> <p>高等部については2022年度から地理総合、歴史総合が必修科目となる。また、各分野の「探究」科目の履修が始まる。現行の高等部の社会科カリキュラムについて改編が必要となる。</p>	B	B

<p>数学</p>	<p>中等部の代数分野では、3年間を通じて基礎的な計算力の定着を目指すとともに関数の考え方を理解し、高校数学の土台を作ることを目標とする。幾何・確率統計分野では、数学的な美しさを発見し、データを活用することによって問題発見、問題解決力を身につけることを目標とする。中等部では、1、2年生において、一人の教員が4時間を受け持つこととした。高等部の4、5年では、全員が代数・幾何・解析・確率統計の基礎を学び、幅広い知識を身につける。6年I類では、経済学などを学ぶために必要な微積分・統計を、II類では同じ分野を理工学部・医学部・薬学部への進学を視野にいれ、より深い内容まで学ぶ。文系・理系を問わず、数学を用いて客観的に物事をとらえ、論理性をもって考えを説明できる能力を養うことを目標とする。また、データサイエンス教育の充実を図り、AI時代に活躍できる人材の育成を目指す。</p>	<p>2020年度はコロナ禍により、5月～7月と1～2月の一部がオンライン授業となった。各科目で実施したオンライン授業の時間数は以下のとおりとなった。(①オンデマンド、②リアルタイム、③演習・課題学習、④その他)</p> <p>1年： ①40 ②10 ③10 ④0  2年： ①46 ②2 ③6 ④29  3年数1： ①21 ②0 ③12 ④7  3年数2： ①8 ②0 ③5 ④6  4年数I： ①29 ②6 ③8 ④0  4年数A： ①21 ②2 ③0 ④0  5年数IIa： ①19 ②1 ③10 ④0  5年数IIb： ①12 ②0 ③0 ④11  5年数B： ①16 ②0 ③12 ④0  6年I類a： ①28 ②12 ③27 ④1  6年I類b： ①10 ②15 ③10 ④10  6年II類a： ①36 ②0 ③3 ④2  6年II類b： ①20 ②0 ③4 ④0  6年経済数学：①8 ②0 ③0 ④0  6年データ： ①0 ②14 ③6 ④0</p> <p>慣れない中でも工夫をこらして学びを遅らせることなく対応できた。</p>	<p>様々な形態で入学する生徒が混在している高1の段階での学力の差を埋める。そのために、今年度から4年生の授業でクラスを2分割した少人数(20名程度)教育を展開した。きめ細かい指導が可能となり、意義を感じている。来年度は少人数教育の特性を一層活かす授業展開を模索していきたい。またアクティブラーニングの積極的導入に向けて、必要な備品・用品(発表用のホワイトボード等)の活用・研究をさらに進める。</p>	<p>新学習指導要領で求められる内容、能力の育成を目指すとともに、これまで本校数学科が目指してきたものとのカリキュラム上での融合を図る。IT機器を用いて効果を挙げている海外の事例も参考にしつつ、情報端末等を駆使した生徒の能力に応じたよりきめ細やかな教育の展開を模索していく。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>理科</p>	<p>中等部は理科室での実験および観察、野外での観察などを通して、本物に触れることを重視し、それらの実験や観察から自然現象の事象や現象についての理解を深め、法則性を見いだすことを目標とする。また、横浜初等部からの受け入れを機に目標達成のさらなる向上を目指す、昨年より継続して少人数教育(1年1分野2分野における週2時間)を試行する。高等部ではリベラルアーツとしてのサイエンスの基礎と位置づけ、物理、化学、生物、地学の全分野の領域を必修とし、生徒の興味や進路希望に柔軟に応えられるよう選択科目を設置している。これらの授業では実験や観察を通して基礎理論の理解を深め、さらに最新のトピックにも触れ、大学や卒業生との連携し高度な実験にも取り組むことを目標としている。</p>	<p>2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で休校や分散登校を行った。通常に登校できる期間は、感染症対策を十分に実施しながら、実験も含めて通常に授業を行った。感染防止対策により、一部の実験器具に使用制限があったため、代替となる実験や教材を準備し実施した。</p> <p>今年度の実験・観察における留意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業前の手洗い。</li> <li>・手でマスクや顔に触れさせない。</li> <li>・分散登校中は理科室の座席は対角線上とし、飛沫拡散防止の観点からクラスでの話し合い活動は原則禁止。</li> <li>・冷房・暖房を稼働、窓とドア解放による換気。</li> <li>・授業終了ごとに机や椅子を、アルコールを染み込ませたキッチンタオルやキムタオルなどで消毒。</li> <li>・保護メガネは共用せず個人購入させた。</li> <li>・触らなければならない(標本など)の扱いについては、触る前後に手洗いし、授業終了ごとに消毒。</li> <li>・主に未習熟学年は、接眼する可能性のあるもの(顕微鏡・望遠鏡・直視分光器・ルーペなど)の使用を不可にした。</li> </ul> <p>webを用いた学習休校期間や分散登校期間にwebを用いた学習としての環境を提供した。学校からwebを用いた学習は、基本的にオンデマンド配信(リアルタイムでなくても受講できる環境の提供)という指示があったため、理科は概ね準拠した。Google Classroomを用いた。以下に、実績、成果と課題を示す。</p> <p>&lt;実績数(概数)&gt;</p> <p>1年：理科1 20回/理科2 20回  2年：理科1 15回/理科2 30回  3年：理科1 30回/理科2a 12回/理科2b 20回  4年：生物基礎 20回/地球科学 9回  5年：化学基礎 20回/物理基礎 40回  6年：化学 30回/物理 20回  6年選択：生命科学I 10回/生命科学II 13回/物質の科学 12回</p> <p>&lt;主な実施内容&gt;</p> <p>オンデマンド配信(教員作成動画、実験動画、教材など)  課題配信(映像教材、Googleアプリ(Forms、documentなど)の活用など)  リアルタイム授業(Zoom、Webexなど)</p> <p>&lt;工夫&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的な学びを意識し、単なる問題演習のみならず、生徒が自ら調べたり、考えたりするような課題を出した。自分自らが材料を準備して自宅で行うことができる実験課題も出した。</li> <li>・比較的簡単な観察に基づくレポートなどは取り組むことができた。</li> <li>・オンデマンド配信では間延びしないような構成に気をつけて教材を組み立てた。</li> <li>・6年ではリアルタイム授業を、web会議ツールを用いて行った。</li> </ul> <p>&lt;成果&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭の生活環境に応じて、各自のペースで学習できた。</li> <li>・興味関心の高い生徒にとっては十分に学習を深めうる機会となり、自ら課題を見出して取り組むことのできる生徒も多かった。</li> <li>・慣れないwebにおいても学習習慣が身につく、生活リズムが崩れていない生徒は、すぐに課題内容を確認し、取り組んでいる様子が見られた。</li> <li>・リアルタイムで双方向のやりとりをしながらの授業は参加した生徒の満足度は高かった。</li> </ul> <p>&lt;総括&gt;</p> <p>中等部では、オンラインを活用しながら各学年に応じたやり方で実験や観察を多く取り入れる授業を展開した。特に、1年では1分野2分野ともに少人数教育を実施し、きめ細やかな教育を展開することができ、十分な成果が得られた。校外学習において、2年は新江ノ島水族館の見学、3年は生田緑地にて野外実習を行った。</p> <p>高等部では、例年に引き続き講義と実験をバランスよく実施し、基礎的な理論を理解させた上で、実験手法などの定着させることができた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、JAXAの見学、PCRの実施、カミオカンデの見学、野外実習は実施せず見送った。</p>	<p>中等部では、2019年度より学習指導要領が改定し教科書も刷新するにあたり、帰国生へのケアも含めさらに教材研究を進める。高等部では、学習指導要領が改定し初等部生が高等部に進学する2022年を念頭に置きカリキュラムの検討を行う。中等部段階では少人数教育がその解決策の一つとなる可能性を信じ、今年度の反省に基づきより効果的な手法を考えながら、人的配置を鑑みつつ、1年に加え、2年においても週2時間ずつの少人数教育の拡大を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対面授業のようにリアルタイムの意見交換をすることが困難であった。</li> <li>・学校で本来行う実験に制限があったため、1年では顕微鏡の指導ができなかった。</li> <li>・スケッチ指導など、生徒の活動中への即時的アセスメントができなかった。</li> <li>・オンラインにおいて、全く応答しない生徒も一定数存在した。担任と協力して働きかけを行った。取り組みの差や理解度のばらつきは通常授業による場合よりも大きい部分もあった。</li> <li>・オンラインでは、より一層、生徒との信頼関係を前提に授業を展開することになると考えられる。対面で直接やり取りができないことにより、文字通り手探り状態で授業設計。</li> <li>・自身の授業の是非判断ができない部分があった。</li> <li>・授業者として、生徒の反応が見えないことから、本当に理解できているのかがわからず不安になることもあった。</li> <li>・リアルタイムでの授業配信においても、学校から録画したものを残すよう指示があったので、決まった時間に参加せず、録画したものをみるあるいは見ないで課題だけをやる生徒が出てしまった。</li> </ul>	<p>横浜初等部からの受け入れにあたり、引き続き一貫教育を活かした授業展開を行っていくことを目指す。今後の少人数教育については、2021年度の中1、中2での実施を踏まえ、6年間の中の土台を作る。高等部では、学習指導要領が改定し、初等部生が高等部に進学する2022年を念頭に置き、高等部のカリキュラムの検討を行う。</p>	<p>B</p>	<p>A</p>

音楽	<p>中等部は基本的な力を養うことに重点おく。基礎的な音楽理論および音楽の歴史について学習し、音楽への理解を深める。また演奏や鑑賞を通して、音楽活動をする事の楽しさを感じることを目的とした。</p> <p>高等部では、より専門的な音楽の理解を深めるよう促す。作曲などを通して、より深く音楽理論を理解できるようにする。また打楽器やギターの演奏、西洋音楽史などを通して音楽の本質に触れることを目的とした。</p>	<p>1学期の間は、オンライン学習で楽典、作曲などの音楽理論の学習を行った。</p> <p>2学期からは感染予防のため、例年行っている歌唱・リコーダーの実技の実施取りやめ、打楽器、ギターのアンプの活動をを行った。表現活動の内容は大きく変わったが、音楽をする喜びを感じることができた生徒は多く、一定の成果が見られた。</p>	<p>今年度と同様、感染予防のため歌唱・リコーダーといった呼気を使う活動は注意が必要であるため、学校医と連携をとりながら、より効果的に学習ができる授業内容を再考する必要がある。</p>	<p>今年度と同様、感染予防のため歌唱・リコーダーといった呼気を使う活動は注意が必要であるため、学校医と連携をとりながら、より効果的に学習ができる授業内容を再考する必要がある。</p>	B	B
美術	<p>身近な物や風景をモチーフとし、絵画や塑像の基本的な制作技術、またそれに伴う観察力の成長を促す。また与えられたテーマから自由に発想し、そのイメージを作品として成立させる能力を養う。</p> <p>中等部段階では経験のある素材を使用し、基礎力の向上と表現の幅を広げる。</p> <p>高等部では専門的な素材を使用し美術の知識を深めながら作品の成立を目指す。年代に応じて技術や素材を進展させ幅広い経験を得ながら、豊かなイメージ力と再現能力を養う。</p>	<p>中等部は、4月から6月までは自宅での実技活動が全くできなかった。7月の1ヶ月間は分散登校での実技授業を実施。1クラスを2分割（18から20名）し、通常の倍の時間を使い実施。</p> <p>課題は、突然登校できなくなることを想定し、1～2時間で完成できるものにした。</p> <p>1年生 デッサン（手を描く） 2年生 デッサン（靴を描く） 3年生 デッサン（顔を描く）</p> <p>高等部は、4月の段階で登校した際の課題の準備等をグループクラスルームに配信。7月の分散登校特別授業は選択科目の為、1クラス（15名程度）での実技授業を実施。</p> <p>高等部は1学期と2学期で担当が入れ替わる為1学期の授業回数が極端に少ないので、作品の完成度はある程度配慮して評価をした。</p> <p>9月以降はほぼ通常の授業を実施。</p> <p>中等部は、通常年3課題を実施していたが、今年は2課題を実施した。</p>	<p>自宅での学習が予想される為、自宅で実施できる課題を考察する必要がある。</p> <p>登校が短期もしくは間が開いてしまう場合を想定した課題を考察する必要がある。</p> <p>登校時の道具の扱いを検討。（消毒等）</p>	<p>横浜初等部生の受け入れが来年度で1年から3年まで完了する。</p> <p>全ての学年6クラス体制。</p> <p>3教室のある美術室の効率の良い活用が求められる。</p> <p>コロナ以前の状態がいつになるか、もしくはコロナ以前には戻らないのかを見極める時期に備えた対策は必要。</p>	B	B
体育	<p>生徒には体を動かす喜びを体験させ、生涯にわたって運動に親しみ取り組むきっかけとし、社会生活を営む為の基礎作りを目指す。</p> <p>基礎体力の強化に加え、体のバランスや調整力を養う運動も取り入れる。</p> <p>安全に対する知識・行動・判断力をつけ、周囲への配慮もできるよう、道徳教育的側面も意識しながら集団の中での態度、姿勢についても指導し、バランスのとれた教養人育成に教科として貢献する。</p>	<p>4～6月では家庭内でもできる運動のレクチャー・体育理論・熱中症・感染症についての知識など、学年に応じた配信授業を実施した。</p> <p>7月からの登校授業では、感染予防対策だけでなく、熱中症対策、生徒の体力低下などを考慮し、安全を第一に考えた授業内容を選定した。施設や用具の利用についても、効率や効果よりも安全を優先した。より安全を高めるため、実技授業では担当教員二人体制をとり生徒の体調確認や感染予防対策に務めた。低下した体力の回復向上に重点を置きながらも、運動を楽しむために必要な基礎技術習得についても意識して取り入れた。ただし、生徒同士の接触を避けるため、ゲーム形式の授業は実施しなかった。</p> <p>4年保健では、例年のカリキュラムを変更し、感染症の基礎知識から、予防法など、今必要な知識の習得や、理解に向けた内容を取り扱った。また仕組みの理解によって、偏見をなくす事にも重点を置いた。</p> <p>【学年別配信授業回数・内容について】</p> <p>※全学年共通：ガイダンス・体力チェック・ダンス・熱中症（確認テスト実施）</p> <p>1年 15回配信 / ストレッチ・体操・縄跳び・バレーボール・サッカー・スポーツ外傷と障害</p> <p>2年 9回配信 / 集団行動・縄跳び・体操・体操・筋力トレーニング</p> <p>3年 9回配信 / 集団行動・縄跳び・ラジオ体操・筋力トレーニング・保健(骨筋肉・体の発育発達・思春期やせ症)</p> <p>4年 12回体育編配信/ 縄跳び・トレーニング・サッカー・心肺蘇生法・体育原理・オリンピックの基礎知識・スポーツ外傷と障害</p> <p>11回保健編配信/ 感染症・生活習慣病・医療制度</p> <p>5年 7回配信 / 筋力トレーニング・縄跳び・サッカー</p> <p>6年 7回配信 / バレーボール・体育理論・体育史</p>	<p>コロナ禍収束まで、感染予防対策を続ける必要があるため、校医、保健師と連携をとり、安全性を確保しながらも、教育効果の高い授業内容を検討する。</p> <p>今年、様々な取り組みによって、教員の感染予防知識や、コンピュータスキルの向上、ICT環境の整備など、多くの発見や前進がみられた事を好機ととらえ、生徒の体力向上や運動に対する興味につなげていきたい。</p>	<p>マスク着用や、身体接触を避ける必要性から、ゲーム形式の授業が当面の間実施できないが、それによる影響（体力・興味・協調性・連帯感）を、注意深く検証する必要がある。様々な制約の中ではあるが、これら体育授業で養われるべきものが、失われないような授業内容の工夫を絶えず行う。</p>	B	B

<p>技術</p>	<p>実践的・体験的な学習を通じ、実際に必要な知識と技術を習得させ、生活する能力と実践的な態度を育てる。1年生で、情報に関する内容、2年生で、加工分野で製図・木材加工、3年生で、エネルギー変換の電気・加工に関して金属などを扱っていく。</p>	<p>1学期、オンラインによる学習時では、1年生はグーグルシステムの基本能力習得のための配信実習、2、3年生には配信していない。</p> <p>7月の分散登校時には、1年生は実施せず。2年生は、製図の学習。3年生は、豆苗の栽培指導・ブリッジコンテスト開催、夏休みの「からくりおもちゃ」の導入を短期間で実施。</p> <p>9月の登校再開からは例年の内容をコンパクトにして実施。1年生は、プログラミング学習を中心に制御学習、2年生は、製図のまとめと栽培学習で豆苗の栽培、木材加工、3DCADで設計製図。3年生は、電気学習と金属加工の分野を行った。例年より授業数が減ってしまったので、各領域の応用的な部分はできなかった。しかし、新たな試みも行えたので次年度へ生かしていきたい。</p>	<p>3Dプリンタを2台導入したので今後の学習内容にどのように生かしていけるかを検討していく。</p>	<p>クラス数増加・教員が2名体制になることで技術室の運用方法を模索しないといけない。10分の休み時間で別学年の授業準備ができるのであろうか。かなり混乱することを予想するので、工夫をしていきたい。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>家庭</p>	<p>中等部では生活に関わる基本的な知識・技術の習得をめざす。栄養や衣服の材料、管理のしかた、子供の成長と発達、住環境の整え方などについて学び、調理実習や衣服制作など実践的な実習を行っている。</p> <p>高等部ではさらに資源やエネルギーの効率的な利用について考え、持続可能性を意識した生活ができることをめざす。また、子供や高齢者など様々な世代の人々についての理解を深めることをめざし、妊婦体験実習や高齢者体験実習などを行っている。学んだことを実生活に生かせるように考えさせるグループワークを行う。</p>	<p>1学期はオンラインによる自宅学習を行った。7月の分散登校期間には2年生の衣服製作実習と6年生の高齢者疑似体験実習を実施した。</p> <p>2学期は様々な制限のある中で、1年の調理実習や5年の妊婦体験実習などの実習も含め、できる限り通常の授業を行えた。被服実習や体験実習時には用具の消毒を徹底し、無駄な会話を控えて静粛にやるよう指導した。調理実習時は食器を持参させ、教室の周囲や廊下に長机を配置し、食食用ガードを使用のうえ、間隔を空けて試食させた。</p> <p>3学期は再び分散登校となり、1、3、4年の調理実習は断念せざるを得なかったが、家庭での学習が充実したものとなるよう努めた。特別授業期間の6年生の3回の授業は少人数の希望者のみであったため、調理実習も含め実施した。5年のおもちゃ製作実習は授業時間が半分になり、困難ではあったが、自宅での取り組みを生徒たち自身も工夫することにより、よい作品を完成させることができた。</p> <p>今年度から2年生の被服実習はTTを導入し、2人体制で指導ができたため、生徒の理解度と作品の完成度が格段に上がり、効果を実感している。</p>	<p>コロナが落ち着くまでは、様々な制限があると思うが、用具をこまめに消毒したり、作業や試食時の注意を徹底することで、できる限り実習機会を確保したい。2年生被服実習のTTは効果絶大なので、今後も継続したい。</p>	<p>被服室が新設され、授業が行ないやすくなった面もあるが、実習をするには狭いのが悩みである。一部の作業は廊下で行なわざるを得ず、そのための環境整備をしていきたい。さらに、暖房設備などの不備が多々あるため、早急に対応していきたい。調理室も次は食器棚を使いやすいものに更新したい。準備室の設備も開校以来、手つかず状態なので、改修を考えたい。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>情報</p>	<p>中等部では、基本的なコンピュータの使い方（タイピング、文書作成、表計算、プレゼンテーションの資料作成）やクラウドを利用した課題確認・提出作業、プレゼンテーションやポスターセッションを通して、発表のスキルなどを身に付けさせる。また、マインドマップを利用したプログラミングを通して、センサーの仕組みや身の回りにあるプログラムによって制御されているものに興味を持たせた後、言語によるプログラミングにも取り組む。プログラム体験時には、フローチャートを書くことで、順序・手順を考えながら作業を行う大切さを理解させる。</p> <p>高等部では、DTV、DTPを通して、物事を表現する手法の幅を広げるとともに、物事を発信する力、人に伝えるものの作成方法を身につけさせる。また、プログラミング作業を通じて、論理的思考を養い、そして知的財産、著作権、個人情報、ビッグデータなどをキーワードとしながら、情報化が社会に及ぼす影響について理解を深める。</p> <p>情報モラルについては、中等部・高等部ともに状況や年齢に合わせて定期的に呼びかけ、考える機会を設ける。</p>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大のため4月～7月はオンライン学習となったが、課題説明の動画を配信し、各家庭のタブレットやパソコンで課題に取り組んでもらうことができた。対面授業時には、プレゼンテーションを実際に行う、DTVやDTPの実習課題に取り組むなど、オンライン学習では取り組みにくいことを中心に行った。</p> <p>10月にはGIGAスクール構想を活用して、中等部生へ1人1台端末配布をした。配布した端末を、対面授業でのプレゼンテーションやオンライン授業などで積極的に活用することで、端末利用に関する基礎固めをし、他教科での授業でもスムーズに積極的に使えるよう連携を図った。今年度は4月よりオンライン学習で学校がスタートすることとなったが、教科の授業を通じて身に付けていたクラウドを活用した授業には概ね対応できていたと感じている。</p> <p>また、授業で得た知識をもとに、他教科、委員会活動、クラブ活動、学級活動等で積極的に上手に利用することができていた。教科の授業を通して身に付けさせたい事柄については、学年に応じたスキル知識が身につけていると感じている。</p>	<p>小学校学習指導要領が変わること、GIGAスクール構想により、1人1台の端末を積極的に用いた授業を受けてきた生徒、そうではない生徒と、いままで以上にICT活用に関するスキルが異なる生徒が多く入学してくることが想定される。入学してくる生徒の実態に合わせたカリキュラムを考えながら授業を行っていく必要がある。</p> <p>今後も新型コロナウイルス感染症対策を行いながらオンライン授業と対面実習授業両方を進めていく必要があると考えられるため、両面に対応しながら学年に合わせたスキル・知識が身に付くカリキュラムを行っていきたい。</p>	<p>発展し続けている情報技術・情報社会の実情、入学してくる生徒たちのICT活用スキルの実態に合わせて、内容を常に変えていく必要がある。また、校内でICT機器活用する環境（場所・施設・机・椅子など）にも目を向け、生徒がICT機器を用いやすい環境整備も行っていきたい。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>

<p>英語 (α)</p>	<p>Our overall aim is to graduate knowledgeable, confident and globally-minded communicators who are motivated to continue their English-learning journeys and to make a meaningful contribution to society.</p> <p>Specific aims for Writing and Grammar: Students will become proficient writers of both academic and creative essays, culminating in a 2000-word research paper written in the 6th Year. Particular attention will be paid to academic writing conventions such as citations, referencing and the need to avoid plagiarism.</p> <p>Specific aims for Reading and vocabulary: Students will improve their vocabulary knowledge and refine their reading skills by studying a variety of novels and non-fiction works typically read by students of the same age in English-speaking countries. Sixth year students will study Shakespeare.</p> <p>Specific aims for Speaking and listening: Students will become confident English speakers. They will be able to make professional presentations and participate in debates on increasingly complex subjects. Sixth year students will participate in the Model United Nations, deepening their understanding of international issues.</p>	<p>Although this academic year has presented us with significant challenges due to the Covid-19 pandemic, we feel that disruption to the normal curriculum has been kept to a minimum due to everyone's efforts to switch to online learning. Indeed, students and teachers alike have learned many new skills which it is hoped will be of benefit as we gradually revert back to normality.</p> <p>Among the Alpha teachers, a wide range of online classes were offered during the school closure from April to September and again during the hybrid timetable we ran in Term 3. Online classes broadly fell into three main categories:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Live online lessons using software such as Zoom and Google Meet (approximately 20% of lessons)</li> <li>2) Pre-recorded "on demand" lessons that made use of Powerpoint, Google Slides, and various programs such as Google Forms and Google Docs to check students' understanding (approximately 50% of all lessons)</li> <li>3) The use of the Google Classroom portal to leave written instructions for students to proceed with their studies at home (approximately 30% of all lessons)</li> </ol> <p>Alpha teachers found that Google Classroom was very user-friendly. Live lessons were generally more successful in the senior high rather than in the junior high, but even the junior high students became used to this style of class as the year progressed. It was even commented on that some of the quieter students in class performed better online than they do in normal lessons!</p> <p>A major development in 2020-21 was the merging of the separate Writing and Speaking courses into a single course containing both elements in Years 1 and 2. This has increased the amount of time spent on writing, which we feel has been of great benefit to the students.</p> <p>As we find every year, the majority of graduating Alpha students have reached the desired level of English. This is confirmed by the results of external exams such as TOEFL and contests such as the Keio Academic Writing Contest and a variety of speech contests. In recent years, a growing number of students are enrolling in the PEARL, Double Degree and GIGA programs at Keio University, enabling them to further develop their foreign language skills.</p>	<p>The Alpha curriculum is under continuous review and we are constantly looking for new materials to enrich the learning experience of our students.</p> <p>Particular areas of focus for 2021-22 will be:</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a) To ensure that we continue make the best use of ICT and online learning platforms to complement what takes place in school.</li> <li>b) To further raise awareness of the real-world issues that our students will face in the future.</li> </ol>	<p>The arrival of the first cohort of Keio Yokohama Shotobu students in 2019 brought with it a number of challenges and opportunities for the English department. We now feel we have successfully implemented a challenging and coherent curriculum at the junior high level that addresses the needs of our highly diverse student intake. The medium-term challenge will now be to ensure that this is continued into the senior high school from 2022 onwards.</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
<p>英語 (β,γ)</p>	<p>中等部、高等部共に英語はコミュニケーションの道具であるという基本理念に基づき、英語での情報を理解する Receptive な言語能力と、また英語で自分の考えを発信していく Productive な言語能力をバランス良く育て、英語を実践的に使うことができる人を育てることを目標としている。ベータの生徒にとってはやや高い目標ではあるが、英検準1級、CEFR B1レベルの言語運用能力に到達することを目指したい。</p> <p>中等部では、3年間で文科省が定める文法事項に加えて、副教材である New Treasure で扱われている発展的な文法事項の学習も進め、さらに、学習した文法事項を発展的に用いた様々な実用的表現、基本的な語彙を身につけることを目標とする。3年次にはパワーポイントを利用した英語での日本文化を紹介するプレゼンテーションができるようにする。</p> <p>中等部入学時の多岐に渡る学習歴及び習熟度に応じてより効果的な授業を行うために、1年、2年では2クラス合同4分割(α1クラス、β2クラス、γ1クラス)の授業展開とする。3年では2クラス合同3分割(α1クラス、β2クラス)の授業展開とする。</p> <p>高等部では英語で情報を発信していくことにも重点を置き、4年で Speech、5年で Debate 6年で Discussion/ Drama / MUN を実施している。プレゼンテーションを行う機会も豊富に設けている。原書や英語でのニュースなどを教材として扱うことで、できるだけ実践的な英語力を高められるように工夫している。英語で情報を読み取り、それらを土台として自分の意見を書いていく Academic Writing の能力を高める取り組みも行っている。</p>	<p>今年度はコロナの影響で、対面での授業が例年の半分程度になってしまったが、Google Classroom や Google Meet、Zoom などを活用することで、例年と同程度、あるいはそれ以上の教育効果を出すことができた。オンライン環境を活用して、主に以下の教育活動を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) オンデマンド動画による授業配信</li> <li>2) ライブ授業配信</li> <li>3) ライブディスカッション</li> <li>4) Google Document での課題・解説プリント配信/課題回収、返却</li> <li>5) 教科書の音声教材の配信</li> <li>6) Google Forms を使ったテストの実施</li> </ol> <p>オンライン授業や課題の配信頻度は、本来行われる予定だった対面授業数よりも若干少ないが、ほぼ同じであり、定期的継続してオンラインを活用した学習機会を提供することができた。多くの授業では、1学期と3学期を合わせて、合計で20~30回程度、オンデマンドを含むオンラインでの授業・課題配信を行った。</p> <p>対面形式の授業は大幅に減ったものの、中等部では従来通り、基礎的な英語力がしっかり身につけていると感じる。音声教材を Google Classroom で提供することができたので、各自自分のペースで発音練習やリスニングを繰り返し行う事ができ、従来の授業以上の効果が得られたと感じる。副教材である New Treasure を軸として、ネイティブの教員と日本人の教員が密に連携し、効果的に英語の4技能の能力を養うことができた。</p> <p>高等部では日常会話レベルの英語力を超えて、Academic な英語運用能力が身につけていると感じる。特に今年度はオンライン学習期間に、英語ニュースの聞き取りなどの Listening 課題を多く出したことで、例年以上に Listening 能力の向上に取り組むことができた。</p> <p>Reading の授業では、原書や新聞記事などを題材にすることで、一般的な教科書には出てこないような実用的英語表現に触れたり、語彙力を強化することができた。また Academic writing の授業を通じて、英語で他者の意見の要約を書くことや、他者の意見を取り入れながら、自分の意見を説得力ある形で表現していく力を養うことができた。</p> <p>5月から7月のオンデマンド課題の場合、自己調整力がある生徒とそうでない生徒との間に学力の定着に開きが見られた。前期の遅れを取り戻せず、学年末を終えた生徒もいた。また対面授業でも social distance をとらなければいけなかったため例年ほど発表や生徒同士のインタラクションを生む活動をするのが難しかった。生徒の積極的な参加を促す工夫が教員に求められている。</p> <p>英検や TOEFL などの資格・運用能力試験のための授業を行っているわけではないが、βの生徒であっても、卒業時まで準1級を取得する生徒の割合は30%を超えるまでになっている。</p>	<p>今年度、Google Classroom などを活用することで、高い教育効果が得られたオンライン教育活動で、対面授業と併用して実施可能なものについては、次年度以降も引き続き実施できるようにしていきたい。</p> <p>日本人の教員と Native の教員が引き続き密に連携を取り、必要に応じてお互いに授業内容を補い合って、学習内容の更なる定着を図っていく必要がある。また、前年度の1年生から使用を開始した New Treasure を、より効果的に用いる方法を今後も考えていく必要がある。</p> <p>中等部3年では、一般の英語のクラスのレベルが一つ(βのみ)となるので、クラスの中で生徒の英語力にある程度レベル差が出ることが予想できる。様々なレベルの生徒らに対して、どのように授業を展開していくのか考えていくことが、大きな課題である。</p> <p>高等部では既習の語彙、文法事項を使って Speech、Debate、Discussion、Presentation、Academic writing などを行い、自分の意見を発信していく能力を高めることももちろん大切だが、意味を優先するあまりに生じる文法的誤りを、見過ごしたままにせず、文法的正確さを高めていくための取り組みを、本格的に行うこともまた重要である。</p>	<p>家庭学習時間が不足している生徒への課題の出し方、予習復習の仕方 self-study habit をつけさせる工夫が必要と思われる。</p> <p>昨年度より副教材として使用している New Treasure シリーズを、それぞれの学年で、より効果的に教材を活用する方法を考えていく必要がある。</p> <p>高等部の生徒については、ITP-TOEFL を毎年実施しているが、国際基準の英語能力テストである iBT TOEFL は、試験の内容が ITP-TOEFL とは大きく異なっている。将来的には iBT TOEFL が要求する統合的言語スキルをさらに高めることができるように、高等部の英語カリキュラムを再構築していくことが求められる。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>

## 2020年度学校評価（慶應義塾湘南藤沢中・高等部）

### 2. 各委員会における自己評価

評価方法	当該年度の始業までに、運営計画と、3～5項目の目標設定を行い、資料を作成する。 年度末に計画の実施状況と、各目標項目の達成度について各委員会の構成教員が、A～Dの4段階で評価する。						
総合評価 規定	目標項目における評価点の平均点を算出し、以下の基準でアルファベット表記をする。 A達成できた（80%～100%）／Bある程度達成できた（60%～79%）／Cあまり達成できなかった（40%～59%）／D達成できなかった（～39%）						
委員会名	目標	具体案	結果	次年度への課題と対策案	中期的な課題	前回 評価	今回 評価
生徒係	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 気品の泉源・知徳の模範となる塾生の育成</li> <li>2. 学校行事の円滑化</li> <li>3. 自宅外通学者の生活指導</li> <li>4. 防災意識の向上・災害時に生徒自身が的確に対応できる知識の習得・交通安全意識の向上</li> <li>5. 防犯意識の向上・情報機器・スマートフォンの適切な活用法の習得</li> <li>6. 生徒の成長に合わせた保健講演会の実施</li> <li>7. 生徒の学校生活全般にわたる支援</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生徒の公共交通機関利用時のマナー・規範意識の向上</li> <li>2. 一人暮らしの会の実施・各寮との連携</li> <li>3. 防災訓練の実施（帰宅方面別の設定／地震火災を想定した訓練）</li> <li>4. 防犯講演会の実施（1年生男女別）／中等部生ロッカーにスマートフォンケースの設置／5・6年生対象に南校舎における情報機器利用の解禁</li> <li>5. 保健講演会の実施（精神保健・スポーツ障害など）</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教員が年間複数回バス乗車指導に取り組んだ。本校生徒の整列マナーは向上していると感じられるが、コロナ禍における乗車マナーに対する苦情も寄せられ、都度全体への注意喚起を行った。</li> <li>2. コロナ禍において多くの学校行事が取りやめとなる中、オンライン文化祭・中等部音楽会・高等部球技大会のみ実施することができた。</li> <li>3. 分散登校開始直後、生活上の具体的な問題点や解決法などを上級生から下級生に情報提供する場を設けた。</li> <li>4. 年度当初に土砂災害警戒区域箇所の避難確保計画を策定し、二期早期に方面別帰宅訓練を行った。</li> <li>5. コロナ禍のため実施できなかった。2年生の定員増に伴いスマートフォン入れケースを増設した。</li> <li>6. コロナ禍のため実施できなかったが、オンラインで校医・カウンセラーによるコンテンツを複数回配信した。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. コロナの感染拡大状況を鑑みた登校（通学時間別登校等）を徹底し、感染防止対策に則った乗車方法を確立する必要がある。生徒自身も問題意識を高く持ち、規範意識向上に向けて自主的な活動を図ることを期待したい。年度当初にバス乗車指導を行う予定である。</li> <li>2. 校医と協働しながら感染防止対策に配慮しつつ実施を検討したい。</li> <li>3. 寮・学校間の連携を密にし、寮からの情報を生徒係・担任団と共有する。次年度は年度当初に一人暮らしの会を実施する予定である。</li> <li>4. 次年度は4月に大規模地震を想定した訓練を行う予定であるが、密を回避した訓練を図る必要がある。</li> <li>5. 4年生にも5・6年生同様、情報機器を有効活用できるような制度を改める。財布・スマートフォン等の貴重品のロッカー管理を習慣づける。</li> <li>6. 次年度もオンラインを併用した形での展開を検討したい。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生徒が湘南台から快く通学できるような輸送システムを確立する。</li> <li>2. 今後、生徒の精神衛生面における支援の機会が増すと考えられるため、学校と家庭がより連携し生徒を見守る体制づくりを模索する。</li> </ol>	B	B
いじめ 防止対策 推進室	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. いじめの未然防止のための措置を講じる</li> <li>2. いじめの早期発見のための措置を講じる</li> <li>3. いじめの早期解決のための措置を講じる</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活、友人関係にまつわる悩みなどのカウンセリング件数の増加に伴い、カウンセラーの相談時間枠の増加に加え、ステイホーム中から現在においても、電話やweb会議システムを用いた遠隔カウンセリングも導入した。</li> <li>・学級活動、生徒会活動、道徳の授業やクラブ活動の場において、いじめについて生徒が主体的に考え行動する機会を設けるように努め、道徳性を育む取り組みを進める。</li> <li>・教職員は日常的にいじめの問題に触れ、「いじめは絶対に許されない行為である」という雰囲気を醸成するように努めるとともに、「いじめはどの学校でも、どの生徒にも起こりうる問題である」という認識の下、生徒の行動に目を配るとともに、生徒との信頼関係の構築に努める。また、個人面談を実施するなど、生徒がいじめを訴えやすい体制を整える。</li> <li>・表面化しにくいインターネット上のいじめへの対応策として、情報モラルを身に付けさせる指導を継続的に行うと共に、保護者と緊密に連携・協力し、双方で指導を行う。</li> </ul>	<p>年度内にいじめにあたる事案が発生していたとは考えていないが、引き続き心を痛める生徒がでないよう最大限の防止策を講じるとともに、いじめの兆候を早期にキャッチできるように努めた。</p> <p>特に、コロナ禍においては、コロナバッシングと呼ばれる濃厚接触者や感染者に対する誹謗中傷が起らないように努めた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中高併せて36クラスと学校規模は大きいですが、一人一人の生徒の様子を丁寧に観察する姿勢を堅持するとともに、いじめ事案が発生しなかったことに安心感を抱くことなく、緊張感を持続するよう促す。</li> <li>・情報端末の進化に伴う新たな問題や、コロナ禍でオンライン化が一気に進んだことよって生じる問題の発生を未然に防ぐため、情報収集に取り組み、情報モラルに関する指導力向上をよりいっそう図る。</li> </ul>	いじめの形態は社会背景に影響を受けて変化することから、教職員が継続的に研修を行なう制度作りが求められる。学校規模が大きくなるが、教職員のコミュニケーションをより緊密にとれる体制を整えていく必要がある。	B	A

		<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒がいじめを受けていると思われるときは、直ちに本推進室の会議を緊急開催して情報を共有するとともに対策を講じる。いじめを受けた生徒を最後まで守り通し、安心・安全な学校生活を送ることができるよう必要な支援を行う。いじめを受けた側、行なった側双方の生徒および保護者に対し、事実関係を速やかに伝え、適切な対応が行えるよう保護者の協力を求めると共に、継続的な支援を行う。</li> </ul>					
文化祭	<ol style="list-style-type: none"> <li>文化祭の運営、管理をはじめ、規則の取り決め、出展企画の活動の統括を行う。</li> <li>クラブ、クラス、有志、教員による各出展企画の、調整および支援を行う。</li> <li>文化祭作業および文化祭を通じ、生徒の文化活動の活性化と学内交流の深まりを目指す。</li> <li>生徒、教員からなる企画を行うことで、本校の校風、活動状況を内外へ紹介する。</li> <li>「文化の薫り」を基盤とした統一性のあるものを創り上げ、本校生徒や来場者に我が校の「薫り」を感じてもらうことを目指す。</li> <li>安全と省資源、節電、ゴミの減量に対する配慮を心がける。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>新型コロナウイルス感染防止のため、文化祭一般公開はオンライン上で行う。</li> <li>在校生間での感染リスク減を目標とし、在校生についても文化祭当日はオンライン参加とする。</li> <li>在校生間での感染リスク減を目標とし、文化祭に向けた準備期間の感染症対策を徹底する。</li> <li>在校生および対外への我が校の文化発信が、オンライン文化祭という形態であっても十全に行われることを目指す。</li> <li>生徒の文化活動を活性化すべく、各企画団体の希望実現を目指し、企画設計への助言を行う。低学年に対しては特に、企画設計段階から完成までの継続的支援を行う。</li> <li>生徒の文化活動を活性化すべく、アカデミックな活動を行う有志企画の出展を補佐する。</li> <li>文化祭実行委員会企画にて、文化祭出展企画外の有志生徒文化活動発表を行い、学内生徒の文化活動を活性化するきっかけとする。</li> <li>文化祭実行委員会企画にて、全学年各企画を紹介することにより、学内文化交流の深化を促す。</li> <li>オンライン一般公開における個人情報漏洩を回避する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>今年度のオンライン文化祭 Web ページ閲覧数(同日中に、同じ端末から複数回アクセスされた場合はカウントなし。本校関係者も含む)は、11/14(土)5,030 端末、11/15(日)4,075 端末であった。一般公開期間中の本校関係者(js アカウント所持者)の閲覧者数(実人数)は、1,134 名であった。なお、一般公開終了後、js アカウントでログインした本校在校生に限り、別 URL にて 11/23 (月祝)まで継続閲覧できるよう設定した。継続期間中の閲覧者数はカウントしていない。</li> <li>「新型コロナウイルス感染症対策指針」を慶應義塾保健管理センターの指針に基づき策定し、文化祭に関わる全ての準備・作業において遵守するよう、全校生徒に呼びかけた。各企画団体には、企画考案と併せて感染症対策計画を立てることを義務とし、各企画顧問教員の指導の下、企画制作を行った。実行委員会備品・消耗品として、間仕切りとして使用する貸出用透明アクリル板、消毒用品、体温計等を用意し、距離の確保、消毒の徹底を行い、感染防止に努めた。</li> <li>オンライン文化祭であることにより、結果として、近年の課題の一つであった企画内容のマンネリ化が打破され、多くの企画で、生徒の持つ創造力・表現力が発露された。</li> <li>文化祭 Web ページ制作および実行委員会企画においては、実行委員以外の 6 年有志生徒も、高度な技術を要する多くの作業を行った。本校生徒の情報スキルを存分に発揮することとなった。</li> <li>文化祭実行委員会企画においては、オンライン開催であっても生徒達の学校への帰属意識を高めること、学年を超えた学内交流を行うことを目指し、実現できていた。</li> <li>今年度は生徒の登校も危ぶまれた一年であったため、オンライン文化祭実施決定から短期間での作業となった。このことにより、文化祭実行委員および 6 年有志生徒、特に高度な情報スキルを要する作業を担当する生徒は多忙となった。今後のオンライン文化祭におけた課題として、準備期間の見直しによる生徒の負担軽減を、教員組織は検討する必要がある。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>引き続き、感染症対策を最重点事項とする。</li> <li>オンライン文化祭であること活かし、より一層の生徒の文化活動活性化の機会となることを目指す。</li> <li>準備期間を見直し、編集・配信を担当する生徒の負担軽減に留意する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>本校文化祭の目標を達成すべく、状況に応じた文化祭形態を考案する。</li> <li>文化祭が、全校生徒の持つ創造力・表現力の素地へと働きかける機会となることを目標に、実行委員会の活動を補佐する。</li> </ol>	B	B

<p>教務</p>	<p>授業や試験などが円滑に行われるように事務処理を行う。 生徒の出欠席の状況を管理する。</p>	<p>1. 授業や試験の時間割・使用教室一覧などを作成する。 2. 次年度の5年生第2外国語の希望調査を行なう。 3. 次年度の6年生選択科目・第2外国語の調査を行う。 4. コンピューター委員会と連携して、電子出席簿の運用を行う。 5. 教室の予約表や備品の管理を行なう。 6. コロナ禍で、定期試験の時間間隔を30分と長くとった。</p>	<p>1. 初等部2期生まで入学し、1・2年生6クラスで教室の運用を行った。義塾の少人数教育推進の一環で、少人数展開の授業が増えた。時間割の作成が難化した。 2. コロナ禍であったので、昨年の各語種の説明会に代わりオンデマンドのガイダンスを配信して参考にさせた。9月予備調査、1月本調査を実施した。 3. 6年生の選択科目が新カリキュラムとなり、調査書類を更新した。科目数が大幅に増えたので、少人数の教育環境が増えた。 4. 新システムの出欠集計が、徐々に軌道に乗ってきた。システムの改善は終了し、運用期となっている。 5. 教室の予約表等をWeb上に移行した。 6. 2学期はよかったが、3学期は換気等の時間に余裕ができた。</p>	<p>1. 年度当初に変更が生じないよう、時間割係・各教科と連携をしていく。規模が大きくなる上に、分割授業やTTも増え、教室の不足はさらに進んでいる。 2. 4年生に対してのガイダンス、希望調査を今年度同様行なう。 6. 授業の開始時間は5分遅らせて運用したが、定期試験の時間間隔も、従来に戻しても問題はない。</p>	<p>新カリキュラムが年次進行し、学校の規模拡大も完成する中で、教室利用や試験実施、時間割作成などが円滑に運用できるように努める。小教室等を利用しやすくする工夫を、施設委員会と連携して諮る。今後少人数教育が拡大していくことも予想されるが、教室の確保が課題である。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>コンピュータ</p>	<p>1. コロナ禍における、生徒の在宅学習、教員の在宅勤務環境の整備。 2. 教員と生徒が利用するコンピュータ、タブレットとその周辺機器の管理及び整備。 3. ネットワーク機器の管理及び整備。 4. プロジェクタなどの映像機器の整備及び管理。</p>	<p>1. 授業や校務のオンライン化に必要なサービスを選定、契約するとともに、その利用方法を教員・生徒に周知する。また、GIGAスクール構想関連の補助金を獲得し、中等部生には1人1台のノートパソコンを整備する。 2. 3. 4. 教員用、生徒用パソコンのリプレースに伴い、機種選定し、スケジュール通りに導入、置き換え作業を行い、9月以降の授業で利用開始できるようにする。</p>	<p>1. 授業や校務のオンライン化を十分なスピードで進めることができた。校務については年度当初から問題なく在宅勤務が可能となり、授業についても5月にはオンラインによる実施が軌道に乗った。また、文化祭においては、初のオンライン文化祭を成功させられた。GIGAスクール構想補助金については満額を獲得でき、秋には中等部生全員にノートパソコンを配布できた。 2. コロナ禍の影響により、委託業者が通常通り勤務できず、今年度はリプレースを実施できなかった。しかし、今年度については「やむを得なかった」と考える。(評価においてマイナスとしない) 3. 例年通り、ネットワークを安定して運用できた。在宅勤務や在宅学習の基盤として、ネットワークを活用できた。 4. 上記2に同じ。</p>	<p>1. コロナ禍においては、校内の情報環境の向上を進めつつも、いつ休校に切り替わっても困らないよう、在宅勤務・在宅学習の環境も整備・向上させる必要がある。しかし、予算・人員のリソースは限られているため、両者の整備を完璧にこなすことはできない。常に優先順位を考えつつ、整備を進める。 2. 2020年度にコロナ禍のため実施できなかった、機器のリプレースを実施する。 3. 文部科学省が提唱する、高等部のGIGAスクール構想について、取り組みを進める。</p>	<p>1. 中等部生・高等部生・教職員全員が、1人1台のパソコンを所有するようになった場合における、校内情報環境の検討。 2. 学校が生徒・教職員に提供するハードウェア、ソフトウェア、クラウドサービスの種類が、ここ数年膨らむ一方であるため、整理する。これにより得られる予算・人員面の余裕を、新しいサービスの提供に振り向ける。</p>	<p>A</p>	<p>A</p>
<p>生徒会</p>	<p>課外活動が著しく制限される中、生徒会組織を全生徒に周知し、通常の学校生活に戻ったときにできるだけスムーズに各委員会組織を機能させる。</p>	<p>オンラインでの委員会紹介の作成を通じ、生徒、委員会の意識付けをする。</p>	<p>1. 教員からの配信が続いた休校期間、学校行事や生徒会組織を紹介する新聞形式の「生徒会通信」を企画、制作し、6月から配信を開始した。打ち合わせ、原稿依頼、構成をすべてオンラインで行い、編集には休校期間に自宅での利用が許されたDTPアプリ、InDesignを使った。7月まで全6号を配信し、生徒会、委員会の全体像を全校生徒に周知することができた。残念ながら活動の機会が全くなかった委員会も出てしまったが、次年度以降の継続という意味で多大な貢献ができたと考える。 2. オンライン開催となった文化祭で、例年の「何でも相談室」に代わり、「生徒会ラジオ」を企画・制作した。受験生から事前にハガキで質問を募集し、その質問にコーナーごとに答える構成で、収録はオンラインで行い、1時間番組となった。この状況で訪問者とのコミュニケーションがとれた稀有な企画であった。 3. オンライン開催となった文化祭で、生徒目線の学校紹介動画、「SFC生の一日(中学生)」「SFC生の一日(高校生)」を制作した。</p>	<p>2019年度と2020年度の活動が全く異なるものになり、状況に応じてその両方を引き継ぐ必要がある。行事によっては2年の空白ができる可能性があるため、開催できない場合でも次年度に引き継ぐ工夫が必要。 オンライン意見箱の設置と効果的な運用。</p>	<p>オンライン意見箱を通して本部役員と生徒とのコミュニケーションを活発にし、生徒全体の自治意識を高めていくことが課題。</p>	<p>B</p>	<p>A</p>

			<p>4. 「正月祭」として1週間校内におみくじを設置した。再び分散登校となった校内にささやかな楽しみが提供できた。</p> <p>5. 「卒業生を送る会」をオンライン形式（HR 視聴形式）で開催した。南校舎の飾り付け、事前収録の動画視聴、生中継による司会、Zoom による HR 中継など、すべてが初めての試みだが、新しい形での送る会を実施できた。</p>				
図書	生徒たちにとってより利用しやすい図書室を司書の方々と協力して運営する。	図書委員の生徒を中心に、図書室での作業・お勧め図書の紹介などを行ない、開かれた図書室作りをしていく。	たくさんの本を読んでもらうことはもちろん、様々なジャンルの本にもチャレンジしてもらいたいという思いから、今年度もスタンプカードを制作し、全校生徒に配布した。生徒が自宅からでも図書室の蔵書が検索できるようにし、図書室内の滞在時間が短くなるよう工夫をした。	COVID-19 のため、十分な活動はできなかった。このような状況の中でも、多くの生徒に利用してもらえる図書室作りを目指していく。	増え続ける蔵書の問題を解決し、書籍だけでなく、映像資料のさらなる充実をはかっていきたい。	A	B
論文実習	<p>論文作成に必要な以下の点を理解すること。</p> <p>1. 先行研究が集められ、そこに述べられている見解や主張が整理されていること。</p> <p>2. 整理した先行研究を「批判的に」見ること。</p> <p>3. 他者の意見を尊重し、自他を明確に区別する方法を学ぶこと。</p> <p>4. 論文としての形式や体裁を知る。</p>	<p>1. 4 月中は教科書『論文実習』をもとに講義を行い、論文を作成するための姿勢を学ぶ。</p> <p>2. 前期・後期で各1回するプレゼンテーションを通じて、「問」と「仮説」、それを結びつける「アプローチ」の論理性、一貫性を確認させる。</p> <p>3. 下書きの査読を通じて、剽窃や形式のチェックを行う。内容や進捗状況があまりにも悪い生徒には書面にて警告書を渡し、自覚を促す。</p>	<p>1. コロナ禍で前期はスケジュールが変更となり、オンラインでの学習となったが、スライドや課題によって論文に関する基礎的な知識や力をつけることができた。</p> <p>2. 前期は中間報告書、後期は発表を通し、「問い」と「仮説」、それを結びつける「アプローチ」の論理性、一貫性を確認させた。</p> <p>3. 下書きの査読を通じて、剽窃や形式のチェックを行う。</p>	<p>1. 次年度は授業が4単位となることから、それに対応したスケジュールの構築がのぞまれる。</p> <p>2. コロナ禍で例年とは異なる形でオリエンテーションを行ったが、コンパクトな形で5年生に説明することが出来た。次年度の参考としたい。</p> <p>3. 今年度のオンラインでの取り組みを、今後にも生かしたい。</p>	2021 年度からの新スケジュールもふまえ、『論文事始』の改訂版を考えていきたい。	B	B
国際交流	<p>1. 春季英国・カナダ留学プログラムの定着</p> <p>2. 男子の参加生徒を増やすこと</p> <p>3. NZ 新プログラム開発</p>	<p>1. 相手校との情報共有のシステムを改善する。具体的には相手校担当者の増員を希望する。</p> <p>2. 中等部3年生対象に高等部3年生に留学体験をプレゼンテーションしてもらう、また引き続き国際交流をテーマとした保護者会をおこなったり、教員室前の掲示板を有効活用して宣伝する。</p> <p>3. 適当な時期に下見を実施する。</p>	<p>新型コロナウィルスの世界的な拡大により、すべての短期留学プログラムが中止となった。</p> <p>11 月より AFS 留学生としてフィンランドから留学生を1名受入れた。各短期留学プログラムが実施できていない中、本校生徒にとって国際交流をするよい機会になった。</p>	外務省および義塾のガイドラインに従って、実施できるものから徐々に再開をしていく。	各プログラム一年間のプランクができてしまった。本校の教育の最大の特徴である「国際理解教育」の充実のため、今後は、留学先の学校の担当者との密に連絡を取りながら、プログラムを再開し発展させていきたい。	A	C
施設	<p>1. 安全を第一として、基本的な施設・設備の充実を常に念頭に置き、計画、整備を実行していく。</p> <p>2. 西校舎、第3 体育館、武道場をはじめ、その他施設・設備全体について、引き続き、現場から報告される経年による改修事案について、迅速に対応していく。</p> <p>3. 新型コロナ感染対策として施設、設備を整備する。</p>	<p>1. 第3 体育館の雨漏り対策</p> <p>2. 第1グラウンド校舎側ベンチ改修工事</p> <p>3. 2,3 年生ロッカー改修工事以上の主な事案について、関係部署との連携により、安全、迅速に各工事を実施する。</p> <p>4. 新型コロナ感染対策として、校舎外部（国際交流室横）に手洗い場を増設する。また、校内の手洗い場の蛇口を対策の一環として整備する。（レバーの交換や自動化）</p>	<p>1. 第3 体育館の雨漏り対策 入試前の応急処置、年度末の大々的な改修工事により無事に終了した。</p> <p>2. 第1グラウンド校舎側ベンチ改修工事 無事に終了した。コンクリートのベンチとなった。</p> <p>3. 2,3 年生ロッカー改修工事 無事に終了した。消火栓、傘立て等を移動したため、従来のサイズの15 倍の容量となった。</p> <p>4. 新型コロナ感染対策として、校舎外部（国際交流室横）に手洗い場を増設した。 また、校内の手洗い場の蛇口を対策の一環として整備した。（レバーの交換や自動化。）</p>	<p>1. 第3 体育館の雨漏りについては、引き続き経過観察し、万一、改善されていないようであれば、関係部署と連携し、迅速に対応していく。</p> <p>2. 既存棟に位置する4 年生のロッカーの改修工事の実施。</p> <p>3. 第1グラウンドの掲揚塔側ベンチの改修工事の実施。</p> <p>4. その他、引き続き、校内全施設における改修箇所の集約と改修計画および工事の実施。</p>	<p>1. 既存の施設も30 年を目前に老朽化も進行している。中高、SFC、三田管財部など関係部署とも連携をとりながら、優先順位をつけて計画性をもって対応していきたい。</p> <p>2. 6 学年すべてで6 クラス揃ったが、もともと教室数が潤沢ではないうえ、カリキュラムが多様化されていく中で、新棟建設、増設等も計画していきたい。</p>	B	A
BLS	<p>1. 救助の実践を通して、緊急事態の判断、危機管理、生命の尊厳、市民の義務を根付かせる。</p> <p>2. 3 年以内の再履修で実行能力の低下を防ぐ。</p> <p>3. ボランティア精神の育成。</p> <p>4. 教職員の受講率の向上。</p>	<p>1. 指導員の指示に従い技術習得に励む。</p> <p>2. 講習後、慶應 BLS 教育の取り組みについて説明にあわせ、校舎内に設置してある AED の場所を確認する。</p> <p>3. 実際に BLS を行った生徒を表彰する。</p>	<p>1,4 年生ともに、コロナウイルス感染拡大の影響により、例年通りの内容の濃い実体験ができなかった為、体育の授業で感染につながる内容を避けつつ、傷病者を発見した際の手技などを各自で撮影し行った。</p>	<p>1. 本年度講習会をできなかった学年を含め、今年度は4 学年実施したい。</p> <p>2. 教職員の受講数を増やすため、学校行事作成の際、教員が受講可能な日程に可能な限り設定をしたい。</p> <p>3. エピペンの講習が実施できておらず、次年度には出来るようにしたい。</p>	この活動は、続けていくことに意義があり、塾生塾員誰もが、手をさしのべられる環境を目指す。	B	D
年会誌	年会誌発行の期日の円滑化、及び正確さを目標とする。	各担当部署に原稿の速やかな提出をお願いする。行事ごとに原稿の依頼をした。校正は年会誌担任のみならず、各クラス担任・クラブ顧問にも依頼した。	コロナ禍で学校行事が中止となったため、写真を含め原稿を集めることが非常に困難であった。例年になり切り口での作文を依頼し、回収したが、分散登校等の影響で締め切りを大幅に遅らせることになった。	提出期限の提示方法の工夫。学校に生徒や教員が集まる機会が少なかったため、締め切りを伝えても徹底できていなかった。行事が次々と中止になる中、代わりに載せる原稿を依頼したが、理解を得てスムーズに変更できた。	社会情勢の変化に対応しつつ、学校生活をより正確に記録に残せるよう、原稿の回収を工夫していく。	B	C

クラブ運営	生徒が安全かつ有意義にクラブ活動ができるよう、環境および制度を整備する。	<ol style="list-style-type: none"> <li>各活動場所における危険箇所を調査し、安全に活動できる活動環境を整備する。</li> <li>クラブ活動における安全で効果的な制度設計。</li> <li>各種手続きや、書類を整理し、生徒、教職員負担を軽減する。</li> <li>熱中症予防などの安全対策。</li> <li>クラブ紹介。</li> </ol>	<p>9月登校再開に合わせ、厳しい制限付きでのクラブ活動実施となった。新入生の入部についても、大幅に遅くなったため、期間や内容について、生徒の希望を満たすような活動を行う事が出来なかった。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>感染予防に必要な、消毒用品の準備、施設利用の条件づくり等を行い感染予防環境を整備した。</li> <li>慶應義塾、及び県の感染予防に関する指針に従い、活動に関するガイドラインを作成した。各部に感染予防対策を策定してもらい顧問には、それが活動で守られているか指導いただいた。また、刻々と変化する社会情勢に合わせ、ガイドラインを変更した。登校しての活動が難しい期間、Googleのサービスを活用してミーティングや、オンライントレーニングを行うなど、各部工夫していた。</li> <li>入部届けに変えて、入部届兼、活動誓約書を提出してもらった。活動再開にあわせて、オンラインでの各種申請の運用を再開したが、トラブルはなかった。</li> <li>毎年実施してきた主将主務・監督コーチを対象の熱中症対策講習会について、密の回避や、活動制限によって、発生の可能性が低かった事などを考慮し、実施しなかった。</li> <li>生徒を集めて行う従来方式は難しかったため、Google Classroomでクラブ紹介クラスを作成し、各部がPR活動を行った。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>来年度以降も、社会情勢に合わせた感染予防対策を講じる必要がある。今年度は顕在化しなかったが、施設不足解消に向けた努力は引き続き行う必要がある。</li> <li>以前と比較すると、活動時間の短縮や、休日の活動制限など、生徒の体力を考慮した制度となっているため、その影響を注視しながらも、しばらくは現行制度での運用を続けたい。</li> <li>生徒、教員の負担軽減を目的としたペーパーレス化を推進してきたが、さらにその適応範囲を広げる。</li> <li>今年度実施出来なかった熱中症講演会について、必要性を考慮しながら実施したい。効率を考慮してオンラインでの実施も選択肢としたい。</li> <li>感染状況が改善しても、オンラインでの実施が、効果的かつ効率的であるため、オンラインでの内容充実を図りたい。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>安全性を高める対策については、検討と改善を続ける。</li> <li>生徒の活動に影響がないように教員負担を軽減する。外部指導者の導入についても、そのメリットだけでなく、デメリットも含めて検討する。</li> <li>電子署名を利用することで、紙の書類を大幅に減らす事を検討すべきである。</li> <li>安全面で、最も深刻な問題は、グラウンドの過密であるため、自由かつ永続的に利用出来る外部施設をつくる。</li> </ol>	B	B
広報	本校の広報に関わる業務全般の実施計画・企画・実施・評価・報告する。	<p>広報に係わる業務全般の改良を通常通り行う。それと並行して初等部からの受け入れ完成年度後の2022年度生徒募集を目指し、大幅な資料改訂を行う準備をする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>学校案内パンフレット（簡易版）の改訂。</li> <li>学校案内パンフレットの改訂。</li> <li>HP刷新版を運用しながら必要に応じて改良する。</li> <li>学校説明会のスムーズな運営と質の向上。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>コロナ禍により外部団体主催の説明会はすべて中止、学校主催の説明会もすべてオンライン実施となった。これに伴い例年6月末から配布を開始していた学校案内パンフレットの増刷の必要性がなくなり、予定していた改訂をすべて見合わせた。</li> <li>休校中に保護者への連絡が頻度多く行われ、その作業を通して現行サイトの操作性や見やすさについて具体的な問題点が見い出された。</li> <li>マスク必須の学校生活での新規写真や動画撮影は難しいとの判断から、全面刷新の予定から再構成版作成に切り替えた。休校・分散登校期間もありスタートは大幅に遅れたが、12月以降業者選定作業に入り、決定に至った。</li> <li>学校説明会をオンラインで行う決定を受けて、従来の内容を変えずに行うことを前提とした。在校生による学校紹介は主に前年度経験者から選定し依頼、加えて校舎見学動画のナレーションも生徒に依頼し、短い準備期間ながら完成に至った。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>パンフレットはページ数を縮小し、学校サイトへの導入版としての位置づけとし、2021年度6月末完成を目指す。公式サイトは、現行の素材とそこにコロナ禍の現状で無理のない新たな素材をいくつか加えて再構成することでリニューアル、パンフレットと同時期切り替えを目指す。</li> <li>今後の社会情勢を見ながら、実施方法を決定していくことになる。オンライン説明会を経験してその利点も少なからずあるので、従来の方法と融合する形で取り入れられることを積極的に考えていく必要がある。</li> </ol>	<p>広報活動資源を全面的に切り替える際には、十分な準備期間を確保することと同時に、広報活動全般に関するディレクターまたはアドバイザーの存在が必要不可欠であることは明らかである。</p> <p>教員側から業者に素材を提供、相談しながらコンセプトを模索している現状は、時間的にも能力的にも担当教員への付加が大き過ぎる。今回の業者選定においてはその点を意識して選定したつもりだが、コロナ禍の状況ではその強みを発揮することが難しいため、次回の切り替え時には現在の延長上で製作を依頼できると良い。</p> <p>その際には横浜初等部受け入れをふまえた学校の教育目標・教育内容を発信し、学校の良さがわかるように学校内外への広報体制を充実させたい。</p>	B	B

<p>芸術鑑賞</p>	<p>人生をより豊かなものにするために、質の高い芸術に接する。 3年間のローテーション（クラシック音楽→日本の古典芸能→ミュージカル・オペラなど）で、多様なジャンルに接する機会を設けている。今年度は古典芸能の年であった。</p>	<p>【演目】 ブロードウェイ・ミュージカル『天使にラブ・ソングを…（シスター・アクト）』</p> <p>【公演日】 7/15（水）13:00</p> <p>【場所】 東急シアターオーブ</p>	<p>新型コロナウイルス感染拡大防止のため、公演が中止となった。 同じく感染防止の観点から、学校外での行事参加、大人数での鑑賞が困難であったため、今年度は芸術鑑賞会を実施することができなかった。</p>	<p>今年度はミュージカル・オペラ鑑賞の予定であったが、実施することができなかったため、来年度に移行する。 高等部生に関しては、7月に公演予定の「高校生のためのオペラ鑑賞教室『カルメン』（新国立劇場）」を鑑賞する。 高校生のためのオペラ教室は実績があり、過去中等部生も特別に受け入れてもらっていたが、今回は人気の高いプログラムのため、中等部生の予約ができなかった。 中等部生に関しては、別の日程でオペラ、またはミュージカルのプログラムを現在検討中である。</p>	<p>チケットの販売方法や公演内容（歌舞伎やミュージカル）によっては費用が高価な場合がある。 3年間で15,000円（年平均5,000円）の予算で行うよう調整する。 芸術鑑賞会を行う時期は、その他の行事とのバランスを考えて7月（1学期末試験後）が望ましいが、7月公演のチケットの団体優先購入をする場合は、前年度の2、3月に人数を確定する必要がある。しかし、在籍生徒数が確定するのは4月になってからであり、生徒に鑑賞してほしいプログラムであっても申込時期の関係で選択できないものがある。授業との関係で、全校生徒が同じ日に鑑賞できるプログラムが望ましいが、来年度も中等部の生徒数が増えるので、検討が必要である。 新型コロナウイルスの感染状況によっては、演奏会などの公演が中止となること、実施されていても入場者数に制限がある場合がある。実施の場合も、感染防止対策に努める必要がある。 大人数での鑑賞が困難な場合、それに替わる文化的活動を検討する必要がある。</p>	<p>A</p>	<p>D</p>
<p>自己点検</p>	<p>教科、委員会が、教育活動の内容について評価する仕組みを設け、本校の教育水準が向上し続ける為の補助的手段を提供する。また、活動内容の重複や効率性の検証材料を提供することで、円滑な学校運営に寄与する事を目的とする。</p>	<p>各年度における教科、委員会の活動内容をまとめ総括を行う。 各組織の目標設定、活動内容の評価と改善の記録が適切になされているかを確認する。 保護者の学校に対する満足度を測るために、有効なアンケート項目を設定する。自己点検で得られた情報を基に、他教科、他委員会相互の情報交換を促す。公表可能な学校評価資料を作成する。</p>	<p>現行の評価方式による作成方法が定着し、スムーズな書類作成で予定が達成された。2018年度より自己評価の客観性と透明性を高めることを目的とし、学校関係者評価を実施した。手順としては、保護者世話人の34名に本校ホームページの学校評価一覧をご覧頂き、各教科、委員会の評価が適切に行われているかの設問に4段階評価で回答して頂いた。</p>	<p>評価書類作成の内容や作成の仕組みについて、教員の特に年度末の他業務への影響を考えると現行の方法が最良であると考え。今後も各組織が自己点検・自己評価を材料に議論を促す仕組みを検討していく。年度間の担当者変更の際にも活用していただく。今後とも本来の趣旨である教育活動全般についての評価が必要である。</p>	<p>文科省「学校評価ガイドライン」平成28年改訂で、小中一貫校における教育目標の設定などについて示されている。横浜初等部との連携の中で学校評価に関しても9年間の中での段階的な目標設定について議論する必要がある。今後は学校評価が形骸化しないような取り組みが必要である。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>
<p>論文実習検討</p>	<p>1. 論文のレベルアップ・ボトムアップを目指す。 2. 生徒の負担軽減をはかる。  以上を目標に、現5年生が6年生で履修する際に適用できるよう、改革をすすめていく。</p>	<p>1. 現在の選択A群を担当教員が指導する時間とすることをふまえ、その運用法・年間スケジュール・評価について検討する。 2. 長期的な改革（Ⅱ類にも課すか等）も視野に入れる。</p>	<p>1. 旧A群の時間については、担当者が2人一組となって時間割内の授業を担当する。 2. 年間スケジュールは、以下の2点を変更。 ・担当者を4月半ばまでに決める。 ・論文提出後の授業で、サマリーを元にしたプレゼンテーションを行う。 3. 評価は「論文7割・取り組み3割」とする。 4. 長期的な改革については記録に残し、今後の検討課題とする。</p>	<p>実際に授業をしながら改善点を洗い出し、新しいテキストを作成する。</p>	<p>長期的には、手法としてフィールドワーク・アンケートなどを取り入れるか否か、Ⅱ類も含めた全員に研究を課すか否か、などについても議論が必要である。</p>	<p>B</p>	<p>B</p>

1年生旅行	<p>クラストレッキングや洞窟探検、稲刈りや教材を使った物作りのプログラムなどを通して、富士吉田の自然や歴史、文化を学ぶ。</p> <p>また、これらのプログラムによって集団生活のルールを学び、規律ある行動を身につけるとともに、友達と協力して一つのことを成し遂げる力をつける。</p>	<p>事前学習として理科の授業で富士山について学ぶ。</p> <p>ホールアース自然学校の方々に来校して頂き、1. 富士吉田の自然や歴史、文化についての講演会 2. 物作りプログラム（ロープワーク、系紡ぎ、ヘンプアクセサリー作成など）を行った。</p> <p>事後学習には物作りプログラムの作品について各自ポスターの作成をした。</p>	<p>コロナ禍、旅行の実施はできなかった。代替案として富士吉田ホールアース自然学校の方々に来校して頂き、講演会や物作りプログラムを行った。新しい物作りプログラムとしては溶岩染めや鹿皮クラフトもでき、好評だった。初めてクラスを越えての交流もでき、生徒は楽しんで取り組めた。</p>	<p>来年度も旅行が実施できない場合は、本年同様に自然学校の方々を招き、講演会や物作りプログラムを実施したい。今後は学年全体での団体行動が課題である。</p>	<p>6クラス同時に旅行を実施することが最善であると考えている。よって、宿舎の変更、もしくは、目的地の変更を検討することが引き続き必要である。</p> <p>また、現在の行程で続行していく場合、雨天時の代替プログラムの充実が今後の課題である。</p>	A	B
2年生旅行	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 東北地方の自然・歴史・文学・風土を学ぶ。</li> <li>2. 集団行動の意義を理解する。</li> <li>3. 防災学習・復興支援プログラムに取り組む。</li> <li>4. 現地の方々との交流を通じて地域文化の豊かさを実感する。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 各教科で学習した内容に触れさせる見学地や体験プログラムを用意する。</li> <li>2. 郷土芸能や郷土料理等を通して郷土文化への理解を深めさせる。</li> <li>3. 東日本大震災に関するビデオを見せる、日本の津波被害に関する本などを読ませるなど、事前学習を行う。</li> </ol>	<p>コロナ禍の影響で旅行は実施できなかった。代替案として以下のことを行なった。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 7月の分散登校時に「遠野物語」の学習を通して遠野の伝承について学び、夏休みに調べ学習の成果として「妖怪新聞」を作成した。</li> <li>2. 平泉の歴史と文化遺産についてのビデオを視聴し、レポートを作成した。</li> </ol> <p>現地に行けないことを非常に残念がる姿が見られたが、上記課題には大変熱心に取り組んでいた。</p>	<p>代替案は、時間と内容の問題で東北地方の伝承、文化に関するもののみになってしまい、震災学習を含めることができなかった。今後旅行が実施できなかった場合を考えて、学校でどのように震災学習をさせていくか具体的に検討していく必要がある。</p>	<p>今後コロナ禍のような緊急事態に直面した時に、どのように旅行を実施していくのか、実施しないのであれば、どのような代替企画を実施するのか具体的に考えていく必要がある。</p>	A	C
3年生旅行	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 広島・四国の自然や歴史、文化に触れ、人々の暮らしについて学ぶ。</li> <li>2. 事前学習を通して、広島を訪れる意義と、自ら何ができるかを考える機会とする。</li> <li>3. 誠実に人の話に耳を傾け、主体的に行動する。</li> <li>4. 集団生活を通して、仲間と協力し合う態度や規律ある行動を身につける。</li> <li>5. 各地の三田会の方々との交流によって、塾生としての自覚を深める。</li> </ol>	<p>事前学習として以下のことを行なった。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「1945年8月6日」を読み、広島平和学習のレポートを作成する。レポート優秀者のプレゼンテーションを行う。</li> <li>2. 松山での班別研修に向けて、班別で行動計画をたてる。</li> </ol> <p>・事後学習として、旅行を振り返り、体験したこと、学んだこと、感じたこと、考えたことなどを総括し、自分なりに表現する。</p> <p>・関係各教科での事前学習等あり（国語・英語・社会・理科）</p>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、旅行は実施できなかった。代替案として以下のことを行なった。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 分散登校時に広島の平和学習として、資料を元に、平和に関する学びを深めた。平和に関するレポート作成も行った。</li> <li>2. 社会科や道徳の時間に平和学習についての学びを深めた。現地に行けなかったが、レポート作成を通じて学びを深めた。</li> <li>3. 平和学習ではないが、12月に校外学習として地質に関する野外実習も行った。</li> </ol>	<p>旅行を再開できることを前提に、準備を進める。また、旅行が実施できない可能性もあるので、その代替案についても模索する。</p>	<p>Aプラン、Bプランのように枠組みを準備し、旅行の主旨に重きを置きつつ、どちらかは実施できるような平行案を用意し、実施できるように尽力する。</p>	B	C
4年生旅行	<p>北陸地方の各地を地学・地理学・民族学的な視点で観察し、地域の自然と人々の暮らしの関わりについて学ぶ。</p> <p>事前学習と現地での学習を総合した、自発的な探求活動を行う。集団生活を通して、協力し合う態度や規律ある行動を身につける。</p>	<p>事前学習として、しおりの資料を各クラス、班に分かれて作成し、コンペティション形式で掲載資料を選定する。事後学習として、1200字程度のレポートを作成させる。</p>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、旅行は実施できなかった。代替案として「福澤先生の思想と生き方」のテーマ学習を行った。</p> <p>①「福翁自伝」を読み、②馬場教諭（慶應義塾福澤センター所員）による講演を聞き、③福澤諭吉、小泉信三に関するビデオを鑑賞したのち、各自で設定したテーマについて日本語または英語のエッセイを書かせ、総合的な学習とした。</p> <p>旅行という形では実施できなかったが、福澤先生について学ぶということは、高等部より入学する生徒がいる4年生には適切な課題学習であり、生徒のレポートも秀逸なものが多かった。</p>	<p>旅行を再開できることを前提に、準備を進める。また、旅行が実施できない可能性もあるので、その代替案についても模索する。</p>	<p>新型コロナ感染拡大のような事態でも柔軟に対応できるように、これまで通りの3泊4日の旅行以外にも、宿泊日数を減らした旅行、1日単位の校外学習・校内活動、オンラインのみで実施できる代替案も準備しておく必要がある。</p>	A	A

5年生旅行	<p>日本史、今年度は古典と、日本の伝統的なことを学ぶ機会が増えている。5年の総合学習では、日本の歴史や文化に対する理解を深めると同時に、現代を生きるうえで必要不可欠なIT技術への関心や素養を高めることを目的とする。</p>	<p>新型コロナウイルスが広がる中、各地の博物館が休館を強いられたが、それぞれが工夫をこらしながら、情報を発信し続けた。「日本の歴史・文化」に関する博物館・美術館をどこか1か所を取り上げ、休館中における工夫や努力について、生徒一人一人の視点から分析させた。海外の施設と比較したり、比較のために、複数の博物館・美術館について調査しレポートとしてまとめ、ポスターの作成をさせた。</p>	<p>今年度の旅行は中止となり、総合学習の代替案として、日本の歴史や文化に対する理解を深めると同時に、現代を生きるうえで必要不可欠なIT技術への関心や素養を高めることを目的とし、結果として、自宅学習も可能で自主的に興味を持った内容を個々の情報収集、発信技術を学ぶことができた。</p> <p>1. ポスター作成に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分なりの工夫の跡が見られる、説得力が高いポスター作成ができていますか</li> <li>・自分なりの工夫をしたポスターを作成できたか</li> <li>・ポスター作成全体的な取り組みについて評価</li> </ul> <p>2. レポート作成に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・課題のテーマをよく理解し、適切な施設をピックアップできていたか。その上で、対象に対してクリティカルな視点を持ち、自分なりの主張を文章化できていたか。</li> <li>・課題のテーマを理解し、対象を客観的に評価していたか。</li> <li>・課題のテーマを理解していたか。</li> </ul>	<p>旅行を再開できることを前提に、準備を進める。また、旅行が実施できない可能性もあるので、その代替案についても模索する。</p>	<p>京都・奈良旅行が実現した場合、滞在中の活動が連日判別自主行動となるため、事前・事後学習と結びつきにくいのが現状である。本校ならではの特色ある修学旅行とするための工夫の余地はある。</p>	A C
6年生旅行	<p>現地で実際に目にすることで、北海道の自然や文化・歴史などについて自発的に学び、理解を深める。</p>	<p>事前学習として見学地に関連したレポートを作成させる。事後学習として実際に見学してきたことを踏まえ、同じテーマに考察を加えたレポートを作成させる。</p> <p>テーマは、訪問地の函館、札幌の、小樽の歴史や都市性などの社会科学系、あるいは鮭の生態、昭和新山・有珠山など自然科学系から選択させた。</p>	<p>旅行は中止となった。総合学習の代替案として、英語のα(MUN)、β(Writing)の授業で共に扱われているSDGsに関連した以下のレポート課題に取り組んでもらった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・レポート課題</li> </ul> <p>現在世界中で新型コロナウイルス感染症が拡大を続けていますが、今後同様のパンデミックを起こさせない世界を実現していくために、あなたが最も重要だと考えるGoalをSDGsの中から3つ選び、それらがなぜ重要であるか、理由と意見を述べなさい。</p> <p>何をすることもSDGsという視点を持つことの重要性はますます高まっている。実際に起きている問題と結びつて、SDGsの重要性について再確認する良い機会となった。</p>	<p>旅行が再開できれば、これまでの旅程と修学内容を基本として、感染対策を鑑みた具体案を立案する。</p> <p>今年度旅行を実施できなかったため、前年度出されていた以下の課題・対策案をスライドして、次年度の旅行に活かしたい。</p> <p>総合学習としての旅行にどのような課題を設定し、評価していくか継続して検討する必要がある。最終学年として深い学びを期待したいが、限られた日数での都市中心の訪問では、事前学習→訪問→事後学習で「北海道」らしさを学ぶには限界を感じる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 台風の影響を受けやすい時期であるため、現状ではサイクリングの日程の所のみ雨天プランを用意しているが、他の日程でもある程度は考慮する必要がある。</li> <li>2. 昭和新山は行程上の立ち寄り場所としても都合の良いところで有り、次年度も継続したいが、上記の通り雨天時のプランを検討したい。しかし、2020年4月に「ウポポイアイヌ文化博物館&amp;公園」が改修終えて利用可能になる（HPを見ても充実した内容が期待できる）ので、おそらくこちらを優先的に、行程を組むことになろう。JTBとも話し合ったが、長距離移動の日にあたるので、アイヌ文化施設と昭和新山・有珠山の両方の訪問は難しいとのことである。</li> <li>3. 例年札幌自主研修では、札幌のみのコースと札幌+小樽コースの2つから選択させているが、ここ数年は札幌コース選択がゼロまたは1班である。教員配置の点からも、次年度からは札幌+小樽コースのみを提案する。</li> <li>4. サイクリングでは自転車の交通マナーをより徹底させる必要がある。</li> <li>5. 体験学習は、解説も含めて効果が高いので次年度も実施をしたい。</li> </ol>	<p>最終学年の総合学習の集大成としては旅行先の再検討が必要である。北海道の主要都市の観光が中心の現状では、北海道の自然や文化を学ぶ機会が少なく、社会系の学習課題も実は他学年と比較しても設定が難しい。行先を北海道で継続する場合でも、行程の大幅な変更を考へてはどうか。バス移動が長く、時間に大幅なロスがあることは懸念材料であるが、以前の道東方面など自然科学系の学習に主眼においたコースの復活も検討したい。</p> <p>将来、第二外国語カリキュラム編成に伴い、語学習得を目的とする旅行が実施されれば、1学年全員で1カ所を訪問するという形式そのものも検討していくことになる。</p>	A A